第12回医学情報サービス研究大会顛末記

喜 多 芳 明*

長崎大学附属図書館医学分館

1. そのものの始まり

それは1994年4月末に東京慈恵医大の山崎氏から届いた1通の手紙で、次年度の医学情報サービス研究大会を近代医学発祥の地・長崎で開催してほしいとの要請から始まった。

この研究大会の案内は、当分館にも毎年届いていたが参加することもなく、まして150人を越すという参加者を迎えての大会運営の自信も、開催時に医学分館に在籍している保証もないので、当然のように謝絶の返事を書いた。しかし、何回か郵便やFAXが行き交い、上京の折りに研究会幹事の諸兄と話し合う中で大会開催のイメージが固まってきた。

結局、過去に一度も参加したこともなく、九州で初めてのこの大会の開催を引き受けたのは幹事諸兄の熱心さと、これまでの参加者の真摯な態度と熱意を聞いたからである。そのうえ、日頃は本誌上等でしか存知あげない医学図書館関係者に会える、また少しは他の医学図書館にお返しができるかもしれないと考えたからである。

2. 準備あれこれ

在京幹事と話を詰めながら、第一回の実行委員会と称して地元の図書館員に集まってもらったのは1994年10月25日の夜だった。前年の盛岡大会と同様に、講演、研究発表、継続教育、ラウン

ドテーブル、企業展示とした内容の第一報を全国に発送したのは12月のこと。合わせて研究発表者の募集を行ったが、なかなか申し込みが集まらない。

幹事からも発表テーマが届くが、まだ数が足りない。初めて九州で開催するのだから地元の発表者と言われるが申込者がいない。締切間際に九州大学からの申し込みがあった時はホッとしたが、それでも足りないと思い、とうとう自分でも発表することにしたが、大会の準備・運営と発表の二足のわらじは気持ちのうえでキツかった。

それでも17本の発表演題が確定し、正式な開催案内を発送し参加を呼び掛けたのは3月末だった。次の週にはさっそく申し込みが届き、これは幸先が良いぞと喜んだがその後がダメ。郵便やFAXが届くたびに参加申し込みかと期待したが、当初の締切日には予定の半数にも届かなかった。この大会は自費での参加者が多いと聞いたが、やはり九州・長崎は遠かったようである。単なる旅行なら海外へ出かけたほうがよほど安くて楽しい時代である。

それでも最終的な参加者は95名となり、うち大学図書館35、病院図書室19、専門図書館11、その他で、規模としてはこれまで一番小さなものになってしまった。なお、今回、中国からの留学生1名を招待することができ、今後も続けられることになったが、医学図書館員の草の根交流としてその成果を期待したい。

このような状況から、直前ではあるが大会会場

*Yoshiaki KITA : 〒852 長崎市坂本1-12-4.

(1995年10月6日 受理)

を当初予定の医学部記念講堂から基礎講義棟第一講義室に変更した。結果的にはこれが良かった。参加者数とのバランスもだが、隣接したいくつかのセミナー室を企業展示や控室に利用することができ、視聴覚機材も完備していたので大変ありがたかった。本学医学部には大いに感謝している。

3. いよいよ本番

さて、明日からの大会を前に、各地からの参加者も続々到着しているであろう午後になって雨が激しくなり次第にドシャブリになってきた。

展示企業の担当者は挨拶もそこそこにパソコンの設定等に取りかかっており、地元実行委員の準備も最終段階になってきた。夕方、幹事に準備状況を報告したが、なんとも落ち着かない。

大会初日の7月1日(土)は天候が気になって朝早く目が覚め、曇り空の中を会場に一番乗り。

会場設営を確認し準備を進めているうちに参加者が次々に到着し、受付開始。9時から継続教育コースとして、愛知医科大学の田中氏、続いて慶應義塾大学の酒井さんの講義が始まる。

午後1時、開会式で実行委員長として簡単な挨拶をし、地元長崎の医学史について中西啓先生の招待講演、JICST 細江氏の教育講演が行われ、研究発表(一般演題)や5社の展示担当者のプロダクトレビューがあって第1日目は無事終了した。

懇親会場の浦上天主堂下のレストランでは、ど

うした手違いか、料理の設定場所が狭く、果たして交流の実を上げることができたのか気になった。特に余興等のプログラムは作らなかったが長崎のお土産その他を準備し福引として楽しんでもらった。懇親会の終わる頃になってまた雨が降ってきたが、多くの人が2次会に出かけたようだ。私は明日の発表も気になり、なんとなくそのまま帰宅した。

2日目の日曜は朝からどしゃ降り、暴風雨と言いたいくらいである。その中で一般演題の発表が続く。今さら外へ出られないためでもないだろうが、参加者はひたすら発表に集中している。

お昼にラウンドテーブル(6分科会)を挟んだが、前日に引き続き、発表者はわずか10分の中でスライドやOHPを使ってうまく発表している。これらの発表をできるだけ早く論文にしてもらって「医学図書館」誌上等でもう一度じっくり読ませていただきたいと願ったのは、私が本誌の編集協力委員ということからだけではない。

プログラムの一番最後に私自身の発表を早口で済ませたが、言わんとしたことは伝わったろうか。でも、これで責任の一つは果たした。

最後のグループまとめでの質疑応答が終わるや直ちに閉会式。型どおりの挨拶よりもJRや飛行機の運休等、長崎からの交通事情を伝えねばならない。長崎の観光どころか、果たして予定どおりに帰れるだろうかと大変気になるが、どうしよう

もない。

熱気の冷めてきた会場では、幹事や実行委員が雑巾やモップを持って後片づけを開始。会場設営の時もだが、幹事も一緒になっての手作りの大会であった。

4. なんとか終わって

雨の長崎というけれど、こんなに雨風が恨めしいことはなかった。しばらくは愚痴やため息ばかりこぼして、家族に笑われていた。

残念だったという気持ちの中には、開催案内の郵送切手からラウンドテーブルの皿うどん、構内の碑巡り等、参加者と共に自分自身もこの大会を楽しみたかったのに予想以上の悪天候で浮き足だってしまったことにあるようだ。来年は医学分館から異動していても、一参加者として名古屋でこの大会を楽しみ、また発表をしっかりと聞きたい。

もう一つ心残りなのは、この機会に九州地区内の病院図書室ネットワーク形成のお手伝いができ

なかったことである。沖縄を含め九州内の総合病院等には別製の案内も出したのだが、病院関係者や地元の医学図書館員の参加はごく少数に終わった。会場での意欲ある発表や各地での活動を聞くだけに、よけいに残念である。

さて、最後になったが、今回は地元の図書館員仲間に随分助けてもらった。開催を担当するにあたって基本的には職場の業務に影響を与えたくなかったし、職員に参加と助力を強制する気もなかった。もちろん一人でできるわけもなく、職員の何人かには実行委員として大変協力してもらったが、名簿の整理・作成や大会の裏方として行動してくれた実行委員には、医系の方々にはあまり馴染みのない大学名もあったと思うが、長崎図書館研究会の地域ネットワークはありがたかった。

今は、この研究大会の実行委員長という機会を与えられたことに感謝し、この研究大会が今後も医学情報サービスに携わる人たちの学習と発表と交流の場であり続けることを願うものである。

第 12 回医学情報サービス研究大会に参加して

佐 野 千 晶

佐世保市立総合病院庶務課庶務係

短大を卒業後、市役所に事務吏員として採用され、現在の部署に配属される。庶務係と一口に言っても、その仕事は幅広く、院長秘書・図書室管理・業績集の編集委員などを、事務と兼任でこなす何でも屋である。司書の資格を持っているわけでもなく、前任者との引き継ぎは三日間だけ、図書に関してはたった一人で購入契約から図書室管理までを他の業務の合間にやるのである。あれから五年、自分の不勉強さを反省しつつ、手探りで一步一步何とかやってきたが、今のやり方で良いのか自問自答を繰り返していた時、本大会が長崎で開催されるのを知り、他の図書室の管理システムや、外部情報を収集するべく大いに期待し参加した。

それぞれの図書室の規模や置かれた立場も異なっており、先進図書室の取組も興味深く、また小規模図書室の取組にも学ぶところが多かったけれど、特に済生会下関総合病院図書室 野原千鶴氏の「中国・四国地区病院図書室の相互貸借状況」という発表には、九州地区の図書室ネットワーク形成を早期実現させる必要性を実感させられた。

また当院では以前から、図書室が飽和状態に達した時の収容スペース確保問題について図書委員会で議論になっていたが、“古い書籍は廃棄処分してスペースを確保すべきだ”と主張する廃棄派と、“貴重な資料であるからプレハブ小屋を建て

てでも保存するべきだ”と主張する保存派が対立していた。私としてはどちらを支持しようもなく対応に困り果てていたが、聖路加国際病院 及川はるみ氏の「アメリカの病院図書室 Suburban 病院図書室を見学して」という発表に、これだ!!と閃いた。古い文献をマイクロ化すれば、資料を保存すると共にスペースも確保できる。しかも、図書室は既にマイクロリーダーを保有しており、答えは目の前にあったのに、私の目には何も見えていなかったのである。もちろん実際に導入するには、他のプランとコスト面やデメリットを比較分析し、将来的な展望を計算に入れながら慎重に進めていかなければならないが、自分の固定観念の範囲内でしかプランニングできないという、一人で仕事をすることの欠点を痛感した。

今大会に参加することによって、自分では全く気付いていなかった潜在的な問題や、現在抱えている問題の解決法など、多くの収穫を得ることができ、非常に有意義な時間を過ごさせていただいた。また、休憩時には名産のカステラや前回開催地の岩手のお菓子をいただき、大会関係者の方々の心遣いも嬉しく、心和む一時を過ごさせていただいたことに感謝しつつ、帰院後の改革プランをあれこれと楽しく考えながら長崎を後にした。